

で働く体力は十分あったものの、お金はなし、食料はなし、薪炭はなし、途方に暮れる毎日であった。

勤めの余暇は、すべて近くの山での薪取りと、さつまいもの買い出しに費やした。子供に学校に行くときに着せる服がない。家内は寝ても起きててももんぺ一つ、私は博多でもらった軍服を染め直して東京に通った。リンゴ箱を横にして板を渡し、一家六人の食卓とした。今では、想像もできないようなどん底生活を十数年送り、ようやく人間らしい生活ができるようになった。時には、既に五十歳を過ぎていた。

こうした個人の小さな忍苦も、日本再建の捨て石になったと思えばむしろ幸せである。

私の青春の思い出

神奈川県 吉山和隆

昭和十八年秋、日本は前年のミッドウエー海戦、ガダルカナルにおける米軍の反攻などを契機として、次

第に重大な局面を迎えつつあったが、東京では時折の町内会の防空演習、灯火管制、主食・繊維製品の統制などを除けば、平穩な日常生活が営まれていた。

当時、私は旧制中学の五年生で、元来のんびり屋であったが、将来の進路を真剣に考えねばならない時期であった。父は南方軍総司令官寺内元帥付通訳としてシンガポールにおり、兄は陸軍技術将校として近々軍務に就くことになっており、残りの家族は母、小学生の妹と弟、就学前の弟と私の五人であった。

その当時は、普通中学卒で職業に就くことはまれで、上級学校に進むことが一般的であり、私も進学を考えたが、家が豊かでないため、私立大学は最初から考えに入れなかった。

そこでまず小手調べの意味も含めて、一般の官立高専などより早く試験が行われる東京高等商船学校、国立大学哈爾浜学院、建国大学に願書を出した。いずれも数十倍の競争率であったが、数日後、高等商船と哈爾浜学院から合格通知書が届いた。

私としては華々しい高等商船に心が動いたが、日本

近海で米潜水艦が跳梁している状況にあり、母が絶対反対であった。そこで入学手続きをせず、そのままにしておいたところ憲兵が調べにきた。当時、高等商船は第二の兵学校として海軍の管理下にあったためである。仕方がないので「国立大学哈爾浜学院に入る」と返事をしたところ、憲兵は「それならよろしい」と帰って行った。これが普通の文科系の学校に入ると言ったら、非国民とつるし上げられたかもしれないと思った。昭和十九年四月二日、哈爾浜学院の新生同行三人組の一人として東京をたち、途中奉天・新京に各一泊し、四月十日朝、哈爾浜に着いた。

戦前の我が国の社会情勢としては、一億人近い日本人が内地四島で自給自足で生きていくことは不可能であり、海外進出が国是とされた。しかし、それには外国との平和友好が絶対条件であるべきにもかかわらず、当時の指導者は武力をもってこれを推進するという過ちを犯した。戦前の中学生にはそのような認識はなく、「海外雄飛と大陸経営の一端を担って」のスローガンは心に響くものがあつた。

当時四年制の国立大学哈爾浜学院は、近く五年制になる予定で、在学中授業料も食事代も不要で、卒業すれば外務省、満鉄、滿州中央銀行など、就職には不安がなく、白系ロシア人の作った緑美しいエキゾチックな町で勉強できるということは、夢みたいな話であつた。

しかし現実には厳しいものであつた。学校から課せられた勉強は質量共に膨大なもので、法律、政治、経済、ソ連事情などからロシア語、加えて選択により中国語、蒙古語、更に体育、軍事教練まで週六日四十八時間授業で、時には日曜日の修練まで加わる状況であつた。

特にロシア語の授業は猛烈なもので、内地では東京外語を卒業しても一等通訳の資格しか与えられないが、哈爾浜学院では一学年終了で二等通訳、二年終了で一等通訳、卒業時には特等通訳の資格が与えられるとのことで、一教室二十余人の学生に対し、ロシア人と日本人の先生がつき、毎日四時間徹底的にしごかれた。

にもかかわらず、学院の創始者後藤新平伯による建学精神「茫漠たる滿蒙、シベリアに活躍する国土の養成」

あるいは閑院宮より下賜された校旗の由来、あるいは講堂に掲げられた後藤伯の「自治三訣」の教え「人のお世話にならぬよう 人のお世をするよう そしてむくいをもとめぬよう」等々についての十分な予備知識も覚悟もなく入学した私は、中学時代までは相当の競争社会を経験してきたはずであるが、大学に入れたとの気の緩みと、生来の怠け者の故に、ロシア語についてはすっかり落伍者になりかかっていた。

露文和訳、露語文法などの担当の日本人の先生は、哈爾濱学院卒業後、東大で磨きをかけたと言われた中田甫先生で、会話担当は白系露人の女性でパノーパー夫人といった。夫人は学生を順次指名し、ロシア語で会話をするのであるが（この教室での日本語は一切禁止）、劣等生の私が指名されると常に出る言葉は、「ヤーニエポニマールユ（わかりません）」「ヤーザビル（忘れました）」の二つだけであった。

このような状態で三カ月が経過し、夏休みの前に前期試験が行われた。夏休みといっても、我々の上級生までは本当の夏休みで、満州奥地、蒙古、中国などへ

旅行や内地への帰省もあったが、我々の夏休みはグライダー訓練であった。

朝四時に起床し、三十分ほど歩いて飛行場に到着、三十分で機材を格納庫より搬出、五時より訓練開始、夕方六時訓練終了、機材格納、帰寮は午後七時。その間朝食休憩一時間、昼食休憩三時間、正味一日八時間の訓練であった。グライダーの搭乗は、最初は地上滑走、次は操縦桿を動かさないまま空中に飛び上がる跳躍。これに習熟した後に操縦桿を使つての滑空となった。滑空も最初は距離も短く高度も数メートル程度であるが、訓練が進むと距離も数百メートル、高度も風の強いときは二十メートル以上となった。

最初の跳躍のときは、ただ操縦席に座っているだけで何もしないのであるが、飛び上がった瞬間恐ろしさで目の前が真っ暗になった。これも訓練を重ね搭乗回数も数十回となると、高い所を飛ぶのは爽快なものとなった。

しかし好事魔多し。教官より急角度の降下を指示され飛んだところ、着地寸前の操縦桿の引きが一瞬遅く、

機体には何の異常も無かったが、不運は重なるもので補助者に付けてもらったベルトの締め方が弱く、グライダーの支柱に背骨を強打してしまった。着地報告はできたが、救急車で哈爾濱赤十字病院に運ばれる羽目となった。

グライダー訓練の次は、近郊の開拓団における勤勞奉仕であった。唐黍、高粱などの穀物や野菜の取り入れが主な仕事であったが、食事は豪勢なもので、米の飯、肉、野菜の煮込み、味噌汁、漬物が食べ放題で、デザートにぜんざいがでて、これも食べ放題と、我が生涯でこれ以上食べたことがないくらい食べた。

このようにして新学期が始まったわけであるが、その前に学院の先輩で寮の舎監の川村先生から呼び出しがあった。

川村先生の話は、前期試験で私のロシア語の成績が不良なこと、哈爾濱学院ではロシア語で落第点を取ると、それ以外の科目がいかにも進級はできないとおしかりであった。これには私も参った。はるばる北満の地、哈爾濱まで来て落第は恥ずかしいし、旗

を巻いて帰ることもできず、心を入れ替えてロシア語と取り組む決心をした。クラス担任の中田先生は七月に応召、その後はやはり学院の先輩で、戦後は三井物産のモスクワ支店長もされた臼杵先生が担任となった。

決心はしたものの、当初は大変であった。毎日出される課題は、白系露人のタイプ嬢がタイプしたものを、わら半紙二枚裏表びっしり印刷した膨大なもので、これを八杉貞利先生の露和辞典と首っ引きで翻訳し、文法書なども勉強し、ロシア語会話も練習し、といった具合でロシア語の予習・復習だけで毎日五、六時間を要した。

三月に一年生四クラス担当の日本人四人、白系露人四人、合計八人の露語教師による連続四日間二十数時間わたる進級試験があり、次いで法律、経済その他の学科の試験も行われた。

試験が終わった後に、再び川村先生から呼び出しがあり、今度はよく頑張ったとお褒めの言葉をいただいた。そうして私は二年に進級した。

哈爾濱学院の寮生活は軍隊の生活とよく似ており、

朝六時の起床から夜十時の消灯まで細かく規定され、学生は勉強と訓練に追い回されていた。しかし、軍隊とは異なり楽しいことも多かった。夜中に「ストーム」と怒鳴る上級生の声に夢を破られ、寮庭でかがり火を囲んで寮歌を歌い踊ったことも、冬、零下二十度を超す酷寒の雪の原野で、野兎を追って走り回ったことも、今となっては懐かしい思い出である。

同級生の中では貧乏階級に属する私がよく行った食べ物屋は、チエンピン（せんべい）屋であった。チエンピンとは水に漬けた雑穀を石臼でひき、丸い鉄板上で薄くのばし焼き上げたもので、満州の低所得層の食べ物の一つであったが、空腹の貧乏学生には結構なもので、これ半斤とトーフタン（豆腐汁）で腹一杯となり、一円でおつりがきた。

しかし時には、市内の地理に詳しい中国語のできる級友に、キタイスカヤ街や松花江の岸のギョーザ屋に連れて行ってもらった。焼ギョーザ屋で一度に五十個六十個と注文して豪快に食べたことも、水ギョーザ屋でニンニクのすりおろしを大根おろしと勘違いして入

れ過ぎ、目を白黒させたことも心に残る出来事であった。

また、食べ物には関係はないが、外出許可日に植物園で白系ロシアの美少女に会い、会話の勉強にと勇氣を出してロシア語で話しかけたところ、日本語でペラペラ返事されロシア語会話にならなかつたことも、私にとつては青春のひとつまでであった。

昭和二十年五月、学校関係者、在校生の見送りを受けて、私は甲種合格の初年兵として公主嶺の機動第一連隊に向かった。

哈爾浜学院での生活は正味一年一カ月で、私の人生の六十分の一にも満たないものである。しかし、その生活がその後の私の生き方に落とした影は、善きにせよ悪しきにせよ、甚だ大きなものであった。その理由を考えると、その一年余が我が国の古今未曾有の変動期に当たったこと、学院の立派な先生、良き先輩の指導を受けられたこと、更に人数は数十人に過ぎないが、すばらしい同期生に恵まれたことであると思う。

学院院长の渋谷三郎先生は陸大出の優秀な軍人であつ

たが、二・二六事件当時、麻布三連隊長であったため満州に渡り、治安部次長（事実上の国防大臣）の職を経て、学院院長になったと聞いた。院長は学生の生活、特に健康や食事などに格別の配慮を払ってくれた。この院長も終戦時指導者としての責任を取ると、令室・子息と共に自決された。

学監の高橋先生は戦争末期に軍務に戻られたが、入隊した我々にはがきを書いてくれた。高橋少将と署名のあるはがきは、中隊内で評判になった。

公主嶺の機動第一連隊は関東軍司令官直屬で、吉林市に司令部を置く独立兵団麾下の岩本大佐を長とする歩兵連隊であった。

当時、東満州において精強を誇った第七軍はフィリピン戦線に送られ、この空白を埋めるため、我々新兵は十八歳を過ぎたばかりであったが、徴兵されたのであった。

三カ月の間、爆破訓練と長距離行軍に明け暮れ、八月八日には一期の検閲をパスすることができた。連隊内では、軍事訓練のほかに幹部候補生の予備試験もあ

り、学科の勉強もしなければならなかった。このため私は外出許可日にも外出せず、隊内で勉強をしていたので、とうとう公主嶺の町の様子は一切分からなかった。

八月九日夜、ソ連航空機の空襲があった。照明弾の投下で辺り一面真昼のごとくなったが、爆弾の投下はなかった。日ソ中立条約違反の不意打ちであり、ロシア共産主義の無法を見せつけられる始まりであった。

翌日出動命令が下った。私の携行品としてはベルトに短剣、擲弾筒、小銃弾をつけ、背嚢に食糧、下着洗面具などを入れ、これに外套、雨合羽、天幕を巻き付け、擲弾筒、鉄兜、円匙、十字鍬、飯盒をくくりつけたものを背負い、雑嚢、水筒、防毒面を肩に掛け、九九式小銃を持つと総重量は優に三十キロを超え、露和辞典その他の私物を持つことは不可能であった。

公主嶺から列車に乗り、新京・吉林を経て哈爾濱に向かい、ここで爆薬を受領した。夜着いてすぐ出発したので、市内の様子は全く分からなかった。哈爾濱から敦化に至り下車、北方の鏡泊湖に向かって行軍を開

始した。

満州東北部より侵入したソ連軍に対しては、牡丹江を中心とする第五軍の主力二万五千人の将兵が死力を尽くして戦ったが、敵の航空機、戦車、大砲に対し、我が軍には極めて少数の大砲のほかは軽機、小銃などの軽火器しかなく、一日半の戦闘で敗れた。この敵の部隊が鏡泊湖岸を通り南下を企てている模様であるため、機動第一連隊はこの湖畔において迎撃すべく、二百キロメートルの道を雨中、夜を日に継ぐ強行軍を敢行、三日後湖畔に到着した。三日間ほとんど眠らず、食事は乾パンを歩きながらかじり、水はその辺りを流れる溝から汲んで消毒液を入れて飲んだ。

敵との遭遇は八月十五日と予想されたが、敵はおそらく大型戦車を前面に立て攻めてくるのに対し、我が軍には最大の兵器でも数門の歩兵砲があるだけであった。

八月十四日連隊全員が集められ、連隊長の訓辞があった。内容は戦況の説明に併せて、特攻隊の編成についてであった。身命を故国の栄光に捧げて悔いなき者、

悠久の大義に生きることを可とする者は、連隊長と共に死んで欲しい。連隊長は諸君の先頭に立って、敵軍に向かって突撃するという意味のものであった。当時の緊迫した情勢の下では、特攻隊に入っても入らなくても、生き残る可能性は全く考えられなかった。「特攻隊志願者、一步前へ」の号令に、私は一步を踏み出した。見ると隊員全員が一步前に出た。

夜になると菊の紋章のついた恩賜の煙草と日本酒が支給された。生まれて初めて口にする煙草は枯草の香りに似ていた。兵隊は戦場では分隊の単位で行動するものである。我々は分隊長を囲んで、飯盒の蓋で冷酒を回し飲んだ。これが今生の別れの杯であることは、だれにも分かっていた。しかし、だれも何も言わなかった。空には星一つ見えない、闇夜であった。

翌十五日、早朝より空は晴れていた。体当たり用の爆薬の支給を待ちながら、「満十八歳の生涯だった。同じ死ぬにしても敵戦車にたどりつき、せめて一矢を報いたい」と思っていたが、連隊本部の様子が何だか変である。そのうち連隊長から命令が下された。関東

軍司令官の命により「我が軍は戦闘を停止する。よってたゞいまより転進する」とのことであった。転進とは聞こえはよいが退却である。

特攻はしないことになったが、嬉しいとも悲しいともいえない、なんとも複雑は心境であった。そしてふと、死刑囚が刑執行寸前に釈放でなく、懲役になつたらこんな気持ちかなと思つた。しかし、それが数週間後に始まるシベリア奥地での重労働への序奏であることなど思いも及ばなかつた。

進んだとき三日かかつた道を、一日半で歸つた。公嶺で訓練した長距離行軍が、こんなところで役に立つとは思つてもみないことであつた。身につけたほとんどすべての物を捨てた。持っていたのは小銃と少量の弾薬、少量の食糧、日用品を入れた雑嚢、飯盒、水筒のみであつた。敦化より再び兵団司令部のある吉林に戻り武装解除となつた。

ここで司令部から呼び出しがあり、出頭すると、ロシア語通訳を命ずるとのことであつた。入隊する折に、学院から二等通訳の資格が与えられたことが登録され

ていたらしかつた。自分のことをロシア語で話すことはできても、他人の言うことを通訳することは難しい。大変困つたが、通訳室に案内されると、学院にいるとき同室で、同じ機動兵団に配属された学友二人が将校服に軍刀姿でいた。そこで私も二等兵から将校姿に变身、原隊では神様ぐらいに偉かつた軍曹や曹長殿が敬礼してくれ、何か天国にでもきたみたいな感じであつた。

しかし、糧花一朝の夢、天国は続かなかつた。ソ連軍の命令で吉林を追い出され、敦化の飛行場まで行かねばならなかつた。しかも今度は列車でなく歩きであつた。

ソ連軍の少将から、日本兵は日本へ歸すから汽車に乗るようにとの演説があつた。そして、それがうそであるとは、だれも考えなかつた。ここで二人の学友とは別れた。

敦化の飛行場で司令部から再び呼び出しがあつた。下士官・兵の部隊は飛行場の広い敷地で天幕生活をしていて、司令部は格納庫の中にあり、木下兵団長以

下の幹部将校がいた。兵団長は私に対し「千人の兵を預けるから、日本に帰るまで耳となり口となり、面倒を見て欲しい」と言われた。軍隊では通常二等兵が兵団長と会話することはあり得ないことであった。私は悩んだ。私の語学力では、一人で千人の兵士の面倒をみることは極めて難しいと考えられた。しかし、千人の集団の中で、ロシア語を解し、話のできる者が私一人であれば、いかに微力であっても私がやらねばならないと考えた。哈爾濱学院の創始者後藤新平伯は「人のお世話をするよう」と教えられた。伯の考えた北方国策に挺身する国士のあり方は、こんな形ではなかったと思う。しかし国敗れた今、私に与えられた義務は、哈爾濱学院で修得したロシア語を、それがいかに貧しいものであっても、最大限に生かし努力することであった。私は兵団長の依頼を承諾した。

八月下旬、私は千人の下士官・兵を引きつれ貨物列車に乗った。

ソ連軍の説明では、鉄道が破壊されており、満洲里經由以外では帰れないとのことであった。しかしそれ

もうそで、鉄道は大連にも釜山にも通じていたことを帰国後教わった。哈爾濱に着いたのはまたも夜であった。水を汲みに駅の外に出たところ、日本の婦人から「汽車に乗っていると、シベリアに連れて行かれる」と教えられた。私の周りにはソ連兵もいなかった。学院の寮まで逃げれば何とかなると考えたが、千人の下士官・兵に頼りにされており、兵団長との約束もあり、逃げるのはあきらめた。

九月二日、私の満十九歳の誕生日に国境を通過した。国境の町満洲里は吹雪で、前途の多難を暗示しているようであった。

列車はチタからシベリア本線を西進し、バイカル湖を半日かけて回った。列車はノボシビルスクで本線と分かれ、タシケントに向かう途中にあるアルタイ州のルプツォフスクに止まった。

ここは印度の真北、北緯五十二度で、東京から直線距離で五千キロメートル、モスクワへは三千キロメートルの典型的な中央アジアの高原地帯で、太陽は東の地平線から昇り、西の地平線に沈んだ。夏は夜中まで

明るい、冬は明るくなるのが朝十時過ぎで、午後三時には暗くなった。気温は、夏は暑い日もあったが、湿度が低く過ごしやすかった。しかし、冬は寒く、最低マイナス五十度まで下がった。

ルプツォフスクでの仕事は、トラクターの鋤を作る工場の作業が主で、その他煉瓦工場、ソフホーズの農作業などがあった。工場は二十四時間三交替制で、日本兵は二、三十人でグループを作り、ソ連人監督の下で鑄物工場、鍛造工場、組立工場その他に分かれて働いており、通訳は私一人であったので、最初の半年は一日に三時間ぐらしか眠れなかった。シベリアでの一年目は慣れない生活、悪い環境、重労働、厳寒、そして少ない食糧のため多くの日本兵士が死亡した。食糧は、収容所長などによる横領もあり、この所長は翌年裁判にかけられ有罪となったことを後年聞いたが、当時は私の語学力も貧しく、訴え出る手段・方法もなく、全く残念であった。

二年目ぐらいから、日本兵は作業にもロシア語にも慣れてきて、通訳の仕事も少しは楽になった。

昭和二十二年春、帰国命令が出たとのことで、生き残った我々下士官・兵は輸送司令タートル人中尉指揮の下、貨物列車に乗り沿海州に向かった。列車は順調に進んでいったが、ハバロフスクを出て、しばらくすると止まってしまった。米ソ冷戦の始まりのあたりを受けて、引揚船の配船が一時ストップしてしまったのである。このため我々の部隊は、ナホトカ北方地区の軍用道路の構築に回された。

タートル人は、スターリン時代、ソ連人に迫害された歴史を持ち、顔つきは日本人そっくりで、最初から我々に好意的であった。タートル人中尉は我々に週休を与え、ソ連人の町に行かないことを条件に自由な外出を許可した。休日に野草を採ったり、小川で小魚を捕らえたりして栄養の補給にした。

早い冬がきて、道路工事ができなくなると伐採作業に回され、ここでタートル人中尉は元のアルタイ州に戻っていった。

伐採作業に入ったころ、食糧の供給が極端に悪くなった。はじめは巨大な松の木から実が採れ、栄養の足し

にもなったが、やがてこれも採れなくなり、毎日の三食が鶏豆の塩煮だけになった。このため、私は過労と栄養失調で壊血病となり、高熱が続いた。毛細血管が切れ皮下出血し、体中に紫色の斑点が現れ、もう駄目かなと思つた。しかし「戦争でも死ななかつたんだ、こんな所で死んでたまるものか」との思いと、戦友やソ連軍医の手厚い看護で命は取り留め、十二月中旬戦友の肩に縋つて、昭和二十二年最後の引揚船山澄丸に乗り込むことができた。

舞鶴では船の病室から真っ先に担架で海軍病院に運び込まれた。ここでの療養の後、相模原の陸軍病院に移り約三カ月後退院し、横浜の家族の元に帰つた。父も兄も軍務から戻り、東京で焼け出された母や弟妹も疎開先の北海道から帰つており、家族全員無事で再会した。

私の義務としてのロシア語は、引揚船山澄丸で完了したと思つた。二年半のシベリアで、辞書も参考書もなかつたが夢中で勉強したので、会話の実力は内地の外語出身者に勝るとも劣らないとの自負はあつた。し

かし、二年半の捕虜生活中のロシア語会話から受けた重圧から、ロシア語を生活の糧とすることには私の心が拒否反応を示し、OKを出さなかつた。

私の栄養失調は退院後も全快とはいかず、就職することは無理であつた。私は再び学校をやり直そうと思つた。家は依然として貧しく、公立学校以外は考へる余地もなかつた。幸いにして横浜で志望校に潜り込むことができた。学帽も学生服も鞆も買はず、軍服を着て、参考書などは風呂敷に包み、夏は下駄、冬は軍靴で学校に通つた。

今度はあの学院入学時と異なり、最初から勉強した。アルバイトは夏休み・冬休みに限つた。卒業に当たつては、商業科・英語科の高校教員免許も取つた。

学生生活最後の難関は就職試験であつた。私は学校で専攻した人事労務管理の關係の仕事をしたと思ひ、いくつかのメーカーに入社願書を出した。しかし社会主義国の実態、ソルジェニーツィンの『収容所群島』に記された一般大衆の貧困・自由のなさなどの現実の認識もなく、不勉強な一部の左翼学生たちの騒動によ

り、シベリア引揚げ復員学徒に対する企業の門戸は、極めて狭くなっていた。これは企業の人事担当者の「触らぬ神に祟りなし」の狭い考えと、人を見る目の自信のなさを示すものであったが、当時の社会情勢としてはやむを得ないことであつたかもしれない。何回かの就職試験に門前払いを食わされた後、東京駅前にある不動産会社に入社できた。

四十六年余の勤務で、何とか人並みの暮らしはできたと思うが、平成九年七月、無事リタイアをした。

引揚げ後、とうとうロシア語を生活の糧として使うことはなかった。数年前から老妻と年一、二回のヨーロッパ旅行を楽しんでいる。ここではつたない英語を使うが、何とかなっている。

しかし、私の英語会話とロシア語会話では、基本的に異なっている点があることに気付いた。それは外国で英語で話す場合は常に考え考え、言葉を探し口に出しているが、ハ爾浜学院のクラス会で出るロシア語の場合は、何も考えないで出てくるということである。

戦後再びハ爾浜を訪問する機会をまだ得ていない。

しかし時に、石畳の道と楡の並木、美しいロシア正教寺院の町、そして郊外の大草原、洋々と流れてきて流れてくる大河、松花江など思うとき、ふと口にでるのはハ爾浜学院の寮歌の一節である。

「……興安の嶺風あれて、バイカルの波騒ぐとき、ウラルの嶺に月もなく、迷える羊此処彼処、嗚呼混沌のこの時に……」

亜州白山郷開拓団顛末記

石川県 西田 武

入植の動機

私は、大正八年九月四日に石川県石川郡鳥越村の農家に生まれ、昭和十三年の秋、徴兵検査を受けたが病気のため不合格となった。当時、日本は支那事変がだんだんとエスカレートし、戦時体制のもとにあったので、お国のために働けなくなったことは大変ショックであった。同級生はみんな軍隊に入って、国防の第一